

山口清三郎博士の戦中日記

日本女子大学理学部 中 村 輝 子
帝塚山短期大学 増 田 芳 雄

1. はじめに ——— 山口清三郎博士について

かつて生物学、生化学を学んだ者で、山口清三郎著「醗酵」(岩波全書、1953)を読まなかった者はいないであろう。これは古今の名著の一つに数えられる。山口博士はこのほか科学史研究者としても別表のように多数の業績があり、バナール著「生命の起源—その物理学的基礎」(岩波新書、1952、鎮目恭夫と共訳)、パストゥール著「自然発生説の検討」(岩波文庫、1970)などの訳書でも知られている。



図1. 山口清三郎博士(昭和25年頃)

山口清三郎博士(写真1)は、ドイツの著名な植物学者ペッフアー(Wilhelm Pfeffer)のもとに学んだのち東京帝国大学理学部植物生理化学教授となった柴田桂太博士門下の俊秀として名をなし、生体酸化を中心とした多くの優れた研究を行ったが、惜しくも45歳の若さで亡くなった。山口博士の略歴は以下のとおりである。

- 1907年(明治40)12月16日 山口 勝とあいの三男として、東京府多摩郡千駄ヶ谷町大字原宿148番地にて出生
- 1911年(大正3)4月 青山師範学校附属小学校へ入学
- 8月 姫路市五軒邸町に転居、姫路師範学校附属小学校へ転入
- 東京市赤坂区青山高樹町へ転居

- 1920年（大正 9） 3月 青山師範学校附属小学校卒業
4月 東京府立第一中学校へ入学
- 1925年（大正14） 3月 同校卒業
肋膜炎の診断を受け休学、湘南地方へ転地療養
- 1926年（大正15） 4月 浦和高等学校理科乙類入学
- 1929年（昭和 4） 3月 同校卒業
4月 東京帝国大学理学部植物学科入学
- 1932年（昭和 7） 3月 同校卒業
4月 東京帝国大学大学院入学（植物学専攻）
徳川生物学研究所所員（註1）
- 1933年（昭和 8） 6月 4日 母あい死去
- 1935年（昭和10） 9月 藤井綱子と結婚、東京都豊島区椎名2丁目1950番地に転居。
- 1936年（昭和11） 2月26日 長兄一太郎、二・二六事件に連座
11月10日 長女輝子出生
- 1938年（昭和13） 10月 4日 父勝死去
- 1939年（昭和14） 1月 次女郁子出生
- 1941年（昭和16） 文部省資源科学研究所（註2）研究員
- 1942年（昭和17） 興亜工業大学（現千葉工業大学、註3）教授
玉川学園教授
- 1943年（昭和18） 理学博士（細菌の呼吸生理学に対する寄与）
東京都南多摩郡町田町原町田に転居
11月 三女節子誕生
- 1944年（昭和19） 5月 徳川生物学研究所を辞し、東京岩田植物生理化学研究所（註4）
研究員
- 1945年（昭和20） 5月 妻子のみ山形県東田川郡狩川村佐藤伝衛門方に疎開
- 1946年（昭和21） 千葉県君津郡君津町周西 千葉工大教員宿舎に転居。資源研にも
寝泊り
- 1949年（昭和24） 千葉工業大学を辞し、資源科学研究所研究員に専念する
東京都南多摩郡町田町南大谷585（現町田市玉川学園1-4-5）に転居
- 1950年（昭和25） 長男進一出生
- 1952年（昭和27） 夜道で米占領軍兵士に襲われ、後頭部を打撲される
- 1953年（昭和28） 4月14日 打撲傷がもとになり死去。45歳

その研究は「物質代謝の生理化学」、とくに生体酸化に関するもので、20数偏の論文は大別して(1)戦前：細菌の呼吸生理に関するもの、(2)戦後：細菌細胞の酵素構成に関するもの、に別けられる（宇佐美正一郎、1953）。その師である柴田桂太教授はドイツから帰朝し、植物生理化学講座を担当、独自の“柴田Schule”の伝統を築いた。柴田教授は“Acta Phytochimica”を主宰

し、この分野の発展に寄与するとともに多くの門下生を育成した（日本の植物学百年の歩み、1982；Bünning，1988；増田芳雄、1992）。門下の秀才であった山口清三郎博士は、柴田学派の主流となる生体酸化の研究を行い、その研究論文のなかにもActa Phytochimicaに掲載されたものが数偏ある。この学術雑誌には、ドイツで学んだ柴田教授の方針で、すべてドイツ語で書かれたもののみが掲載された。同誌に掲載された山口博士の最初の論文は光合成の研究で有名な田宮博教授との共著である（Über die Aufbau-und Erhaltungsaemung. Beiträge zur Atmungsphysiologie der SchimmelpilzeⅢ、別表参照）。その人柄、研究については大田信（1953）、宇佐美正一郎（1953）および山田坂仁（1953）にくわしい。

略歴からもわかるように、山口博士の研究生活は昭和7年から28年の20年間で、この時期はまさに日本および世界の戦争の時期に一致する。すなわち、今日と比べると想像もできないほどの悪条件下の研究生活であった。戦争への道を進む日本国、物資不足、召集や動員、空襲、疎開、等々、このような条件下でよくこれだけの研究と著作ができたものと、あらためてその研究者としての情熱と能力に驚嘆するばかりである。また、興亜工業大学教授として、戦争中の悪条件下で教育に努め、学徒動員や疎開の世話など、学生の手世に懸命の努力をしている。宇佐美教授によると（1953）、山口博士が死去した当時の文部省資源科学研究所の手当は税込みで17,000であったという（ちなみに同じ年、国立大学助手に採用された筆者の一人Y. M. の給料は7,400円であった）。

2. 山口清三郎日記について

今回、山口博士夫人の許可を得てここにその抜粋を紹介することになった日記は、いわば当時の一研究者の生（なま）の記録ともいうべきもので、研究論文には現れない、当時の日常のさまざまな出来事は読むものに直接に肌を感じさせる生々しい時代の流れが描かれている。5年日記帳に記された戦争中の記録（図2、3）は半世紀を経た現代とは隔世の感がするが、当時の第一線研究者の研究に対する情熱と苦闘、そのような環境下における研究者の交流、当時の世界情勢、日本の情勢、人々の生活、などがいきいきと、しかも淡々と述べられている。

筆者ら植物生理学を学ぶものは、山口日記に登場する研究者の動きに大変興味がある。例えば、以下の人々である。柴田桂太（東京帝大教授、植物生理化学）、田宮博（同）、高宮篤（同）、小倉安之（同）、中井猛之進（同）、和田文吾（同）、篠遠喜人（同、国際キリスト教大学学長）、湯浅明（同、日本女子大学教授）、八巻敏雄（同）、宇佐美正一郎（北海道大学教授）、奥貫一男（大阪大学教授）、江上不二夫（名古屋大学教授）、太田行人（同）、長尾昌之（東北大学教授）、小野記彦（松山高等学校教授、東京都立大学教授）、宝月欣二（東京都立大学教授）、山根銀五郎（第七高等学校教授、鹿児島大学教授）、その他、遠藤冲吉、服部広太郎、松崎悦三、山口千之助、八木秀次、式場隆三郎、さらに、徳川生物学研究所を創設した徳川義親氏（東京帝大植物学科出身）が現れるが、同氏は当時、日本軍が占領していたシンガポール（当時「昭南島」と命名）の植物園名誉園長、博物館の名誉館長を勤めていた（Corner、1982；増田芳雄、1993）。なお、これら先輩たちのうち、高宮、湯浅、山口博士らが学部学生であった昭和5年始め、学生実験室の様子を記述した湯浅教授の手記紹介がある（中村輝子・増田芳雄、1995、1996）。また、この日

1941

午後から晴れる。曇る物上る。 東 26° 南 25° 仙 25° 座 25° 青 20°

独ソ北部戦線で独軍は赤軍の師団を掃蕩したと云ふ。又レニングラード近郊に達したと

傳へられる。31日朝にカフカザン戦線地区：ホロホフ、ノボロシツク、スエレンク、ヴィーロ

独英空軍は、川上へのペワエ空襲。独機はモスクワ空襲。セロセ中：戒嚴令

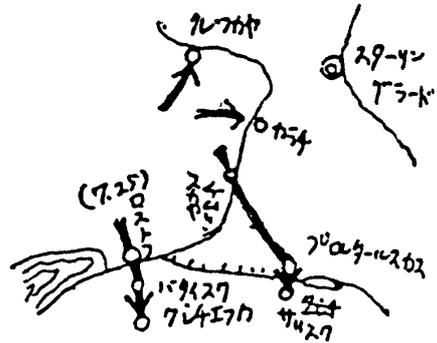
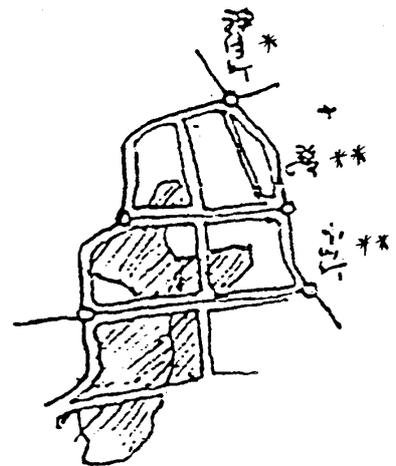


図2. 山口日記の一部、1942年8月1日

1944

小雨。朝神保町の煙草店を

岩石で突撃



* 神保町
** 馬込河台
*** 小川町

図3. 山口日記の一部、1944年12月1日

記から山口博士がその師である柴田桂太教授と緊密に連絡をとりながら研究を進めていたことが読み取れる。

今回ここに紹介する山口日記の抜粋は、主として博士の研究と、戦争当時の日本および世界の情勢を記述した部分に限定し、個人的な出来事を記述した部分は最小限にとどめた。戦時下の研究、読書、研究集会、教育についてはかなり詳しく述べられているが、この日記の特色はヨーロッパにおける戦争の推移が、ときには自筆地図入り（図2）で詳しく追跡されていることであろう。山口博士は反独、親ソの傾向をもってたとみえる。当時の日本の知識層はマルキシズムに大なり小なり傾倒していたから、このような傾向は山口博士に特有のものではなかったであろう。まして、著書や論文を発表した岩波書店との関係から見ても、このことは自然であったろう。ナチスを批判することによって間接的に日本軍を批判していたのかも知れない。

戦争末期の時代の動きをこの日記は実に生き生きと記述している。たとえば、国勢調査の結果、物資の不足、内閣の交代、日米会談、開戦、防空演習、空襲、山本五十六海軍大将の戦死、アッツ島玉砕、サイパン島玉砕、学徒動員、疎開、ソ連参戦、敗戦、そして戦後の大学授業再開、米兵の様子、戦争裁判、など。広島、長崎に関しては、8月3日から9日までは連日、岩田研究所への出勤の記述があるのみであるが、9月22日になり、柴田先生の連絡で、広島、長崎出張の件取り止めの記述がある。当時の学会の重鎮、岩田研究所所長であった柴田先生の立場、すなわち、ペニシリンの製造に見られるような、軍との関係を考えると、柴田先生は原子爆弾の投下後、ただちに行われたであろうその分析、対策の検討などの渦中にあつたと考えられる。山口博士はその側近であつたので、当然それに関係していたと考えられるが、残念ながら原子爆弾に関係する事柄は個人的な感想、公的なこととともに日記に記述するような状況ではなかつたと考えられる。9月22日の記述により、山口博士を含めた岩田研究所の研究員も参加する原子爆弾投下地への調査班の検討がなされていたであろうことを窺い知るのみである。

ここに紹介するのは、研究活動を中心とした日記抜粋ではあるが、これは戦時下研究者の日常生活をいきいきと伝えているのみならず、山口日記が科学史の第一級資料であろうことも示しているといえよう。

註1. 徳川生物学研究所。1914年に東京帝国大学理学部植物学科を卒業した徳川義親侯爵は、9月、武蔵小山に徳川生物学研究所を設立し、自らの研究を続けた。初代所長に京大教授だった桑田義備博士がなり、5年後に学習院教授、服部広太郎博士を二代目所長に迎えた。所員としては、大町文衛、稲荷山資生、江本義数、平山重勝、田宮博、山口清三郎、奥貫一男ら、また戦後は柴田和雄、長谷栄二らが加わり活躍した。のちに研究所は目白の邸内に移され、徳川の援助を受けながら活発に生物学の研究が行われ、1970年までの53年間存続した。とくに田宮博博士を中心にした光合成の研究が有名で、なかでもクロレラの大量培養の成功が知られている。戦争中、陸軍兵器行政本部、第七研究所との関係から研究所の転換がはかられ、軍への援助が要請されたことがあった。閉所後、研究所は乳酸飲料会社に譲渡された（田宮博ら、1970から）。

註2. 文部省資源科学研究所。昭和16年12月、文部省直轄の研究所として東京赤坂区青山高樹町に創設。柴田桂太博士を所長とし、その下に植物、動物、地質、地理、人類の5学部がおかれ、所員9名、助手25名、研究嘱託51名、研究補助員26名という構成であり、当時第一線の若手

学者を擁し、学会、諸方面の期待と後援はなみなみならぬものがあつた（松井健、1954）。発足後間もなく戦火によって焼失したが、戦後21年3月に文部省の直轄を離れた。すなわち、財団法人資源科学諸学会連盟の付設研究所として新宿区百人町の旧陸軍技術研究所跡に移って再出発した。研究所の目的は、国内天然資源の利用開発に関する科学上の総合的研究を行うことにあり、これに必要な調査、研究活動を実行し、その成果を公表出版して社会の利用に資することにあり、とされた（山口清三郎、1951）。戦後は公益法人として、主に文部省の助成金により運営されてきたが、その財政は困難を極め、文部省の助成金打ち切り、科学博物館への所員一部吸収合併の方針により1971年に閉所された（安芸皎一・小倉謙、1971）。

註3. 興亜工業大学（現在、千葉工業大学）。1942年、文部省の認可により発足。小西重直学長（教育学者、京大名誉教授、1933年京大総長）、森理事長（日本冶金社長、のち社会党国会議員）のほか井上正蔵（文学担当）、早川康弼（物理学、数学、人文担当）、山田坂仁（哲学担当）、山口清三郎（科学、人文担当）らの教授陣。機械学科、冶金学科よりなる。発足当時は玉川学園創立者、学長（学監）小原国芳氏の好意により同学園のキャンパスを借りて開校。のち上智大学、東京工業大学（八木学長の好意により）の教室を借りる。戦後は千葉工業大学と校名を変更し、現在の学校所在地、千葉に移る。1944年の入学試験においては、全国募集枠では3000人の受験生があり、73人が入学を許可されたとの日記記述がある。

註4. 岩田研究所（東京岩田植物生理化学研究所）。岩田正二郎氏により1935年に東京市滝野川区西ヶ原に設立され、柴田桂太先生に寄託される。岩田氏は兵庫県川西町加茂の旧家の嫡子で、東大理学部植物学科選科1919年卒業、柴田門下生。当時、岩田土地合名会社社長。柴田先生の恩に報いるため、東大退官後の先生の研究の場を提供する目的で当研究所を創立。研究所は立派なコンクリートの建物で、1934年に新設された東大理学部が坪あたり建築費用が250円であったのに対し、岩田研究所は750円であったという。なお、岩田氏の柴田先生への預託金の利息により、柴田先生の編集で発行されていたActa Phytochimica（1922年創刊）も同研究所で発行された。開所当時の研究員は、田沢康夫、薬師寺英次郎、林孝三、渡辺篤で、1944年に奥貫一男、山口清三郎が入所。1948年3月閉所。

3. 日記（1941–1945）（必要に応じ括弧内あるいは*により説明をつけた）

1941年（昭和16年）

1月 1日 研究所*、服部（広太郎研究所長）、門野、佐野、外山（母方大伯父、1897年東大総長、1898年文部大臣）、大島、訪問年始。中村君（軍の許可により）休暇を得て帰京。夜カルタ。（*徳川生物学研究所、東京豊島区目白町）

24日 夜、生化学談話会に出席。小谷氏の量子化学に関する講演あり。細雨、暖かし、ひさしぶりに本郷通り本屋をのぞく。

25日 柴田先生*とお話する。Sulfonamid系統の研究当分続行すべし。NatureにJ. Russel (F.R.S.) の食糧問題に関する論文あり。（*当時、東京帝国大学退官後、徳川生物学研究所生理学研究主任、岩田植物生理化学研究所所長）

26日 1. 質点力学、剛体力学、2. 弾性体、流体、の二つを平行して勉強すること。2

月末迄に完成すること。

28日 実験。空襲避難場所の調査票が来た。

31日 夕方、白水社に行き、“ユダヤと反ユダヤ”一長寿吉を求める。きは物と類を異にする本書に就いてユダヤ、ユダヤ人を研究すべきである。

2月 1日 “ユダヤと反ユダヤ”は案外面白くない。柴田先生とSulfonamidの話しをする。

3日 実験が大分進捗したからdataを整理する。Franceは憂鬱である。反独運動が伝えられている。

6日 Pasteur-Abend 第一回例会。午後6:30。Cytochrom-Reduktase, Cytokrom-Peroxydase-M. H. Tameya。

8日 柴田先生とお話しする。Einfluss von Zn auf das Wachstum der Bakterien, die auf die Sulfonamid-haltige Nährboden gezuchtet sind! Einwirkung von Nicotinsäure! Rene Sand: 社会医学の原理を購入。

13日 Wells & Huxley: “Science of Life.”

14日 Cu, Zn はAzotobakter のWachstumに対するSulfonamidの抑制作用をaufhebenする作用はないらしい。

15日 柴田先生とお話しする。Katalase及びDehydraseとSulfonamidとの関係を研究することにする。

22日 新宿紀伊国屋に行き「古代科学」、「学生と科学」を求める。科学史を系統的に勉強せよ（尚ほ科学方法論と認識論も）。

3月 1日 柴田先生のお話し承る。p-Aminobenzoessäureに就いて。

2日 銀座に行き伊東屋でノートを。三味堂でOparinの“生命の起源”を買ふ。

4日 Oparinを全部読み終わる。取り扱っている内容が新しいのではなく内容の取扱い方が新しいと言へる。反応系の整合性、Coazervation注意。

5日 Oparinに関連して“Handbuch der Enzymologie”中のFudpiosの論文を読む。これは精読の必要あり。

6日 夜Pasteur 会例会で抄読する。

7日 Oparin中の二、三の誤訳について。

13日 午後5時から山上御殿で抄読会がある。七高に赴任する山根君（*銀五郎）の送別会を兼ねる。久し振りで柴田先生の抄読を承る。Kynurenin に関するButenantの研究、KuhnのClamydomonasの物質に関する研究ect. geneの問題は大いに研究の価値あり、小倉（安之氏、S8同門）と飲む。

15日 先生からp-Aminobenzoessäure 0.1g程戴く。Wachstum及びAtmungに対するAntisulfonamidのactionを調べる事となる。中村君が昨夜から外泊を得て帰ってくる。夜話しにゆく。Winderbandを勉強すること！山田坂仁氏*に手紙を出す。（*哲学者。オパーリン著「生命の起源」の翻訳者。後に著者の推薦により千葉工大教授となり、筆者と同時期に教鞭をとる）

16日 昨日買ったAndre Siegfried “スエズとパナマ”を読む。

- 21日 山田坂仁氏より手紙を貰ふ。手紙を差し上げた事が無駄でなかったことを知った。
- 23日 日劇に行き、“馬”をみる。雰囲気は成功しているが構成本力に乏しい。ミルクブラザース：余りにも愚劣なり。
- 4月 4日 Beiträge IVの論文を見直す。近く印刷に付される筈。
- 5日 柴田先生にお目にかかる。Haldane の翻訳を中心に田宮（博）、高宮（篤）両氏と議論する。
- 6日 ドイツがユーゴとギリシャに宣戦布告して侵入開始したよし。
- 10日 四日かかって読直したZolaの“大地”を読了する。Nicotinic acidに関する文献を漁る。
- 11日 午後、研究所の屋上で恒例の御花見をする。
- 12日 午後三越に行きダンネマンの第二巻を買ひ、丸善でイリブペトロフ“黄金の子牛”買ふ。夜ダンネマンの一卷のアリストテレスを読む。是はハイベルグと併読すべきである。子牛のほうは100 ページまで読む。我が国にこの様な作家の出ないのは国民性の差か？
- 13日 ダンネマンを読みデモクリトス、ルクレチウスに興味を感じた。日ソ中立条約発表さる。
- 14日 “黄金の子牛”を読了する。底抜けの風刺である。チェルノモスクの「てんかん院」の贖患者etc.。この様にvolumeのある徹底した風刺は日本文学には未だかつて存在しない。
- 15日 独軍はEgypt に侵入した。ユーゴ、ギリシャでは独軍は圧倒的なり。
- 18日 夕刻各紙はユーゴの無条件降伏を伝えて居る。また、ギリシャの降伏も切迫して居る模様である。国勢調査結果発表。

			昭和10年	増加率(%)
内地	7311 (万人)	東京	678 588	15.4
朝鮮	2433	大坂	325 299	8.8
台湾	587	名古屋	133 108	22.7
樺太	41	京都	109 108	0.8
関東州	137	横浜	97 70	37.5
南洋	13	神戸	97 91	6.0
計	10523			

19日 午後、大学の理学部講堂で植物学会例会でパストゥール研究のルイ・コマンド氏の作ったsperm, micromanipulator, Amoeba 不完全菌等の顕微鏡写真に感心する。日本映画“ある日の干潟”はみられるが、“銀杏”は成っていない。“科学する心”はまったく非科学的で不可。

22日 ギリシャ全土の降伏が伝えられる。北方（エビルス、マケドニア）の事であって、全土ではないらしい。英軍は尚ほテルモピレーに拠って居るが独軍の一部はこれを破ってテーベに迫る。

24日 ユーゴ政府はEgyptに、ギリシャ政府はクレタに移転する。

27日 独軍はアテネに入城したらしい。コリント占領さる。

28日 朝刊によれば独軍は四月二十七日午後十時アテネに無血入城し、アクロポリスに夕(ハーケンクロイツ)が翻って居るといふ。

30日 チャーチルの国会における報告によるとギリシャ派遣の英軍6万の8割は無事撤退したと言ふ。

5月 1日 Nicotinsäureの実験成功した。

2日 イラク政府は30日にバグダッドの駐英国公使に最後通牒を発した。即ちバスラに到着した英輸送船の即時撤退と、イラクに上陸した英軍の2週間以内の撤退とを要求し、容れられなければ武力に訴えて目的を貫徹する旨、声明している。

6日 Nicotinic acidの実験をする。高等植物でもするべきである。

9日 物凄い煙草不足。朝三分間で店頭から煙草消失。「はぎ」「あやめ」を吸ふ。

13日 ナチスドイツの副総統ルドルフ・ヘス謎の飛行。突如スコットランドに着陸。党本部精神錯乱と発表。十日夜一台のメッサーシュミットがスコットランド南岸を横切りグラスゴー方向に飛び去ったがグラスゴー近くで墜落。一人のドイツ将校はパラシュートで降下。かかとを負傷し病院に運ばれたよし。

14日 ヘス事件で持ち切りである。奇怪な事件で真相は時が解決して呉れるのを待つより法がないが、Nazisの内紛と想像される。チャーチルは議会で「嬉しい質問攻め」にあった。

17日 フランスがシリアを独空軍の基地に提供したと伝えられる。英国とヴィシーの風雲急。英機はシリア飛行場を爆撃する。

20日 南江堂にゆき本三冊買ふ。赤坂の連隊*に送る。(*長兄山口一太郎が所属していた歩兵第一連隊。当時、二二六事件に連座し、小菅刑務所服役中。長兄に渡してもらうために、連隊に本を送る)

21日 独軍のグライダー部隊のクレタ攻撃が開始された。

24日 柴田先生に論文前半をお渡しする。Nicotinsäureは当分続ける。独軍はグライダーで軍隊、機銃、山砲を輸送し英軍と激戦がクレタ西部地区で行われて居る。英軍の旗色は悪いらしい。

25日 ラジオ放送により英巡洋艦フッド(四万トン)がグリーンランドとアイスランドの間の海峡でビスマルク号の砲弾が火薬庫に命中した為撃沈された事を知る。

26日 クレタの作戦は英に非。映画館に“Sieg in Westen”(勝利の歴史)。この映画を見ても大して驚かない程独軍の勝利に関する伝説や神話がこの国に氾濫して居るのだ。ダンケルクは悲惨なり。

28日 ビスマルクはブレストに帰る途中撃沈された。航空母艦アーク・ロイヤル登載の英機の空中魚雷で減速し、King George Vの砲で撃沈さる。

29日 クレタにおける英の敗戦は決定的らしい。

31日 柴田先生に御目にかかり論文の件御相談する。帰途神田で本を4冊買ふ。ヴァレリ、ラド：ルイ・パストール。メール：細菌物語。ダンネマン：第3巻、服部：生活の中の植物。クレタカンヂャ(ヘラクレオン)陥落し、敗退する英濠軍により第三のダンケルク出現か。

- 6月 1日 英軍バグダッドを包囲。イラク降伏。ガイラニはイランに逃走。
- 3日 論文本体出来上がる。
- 4日 夜までかかって論文を完全に仕上げる。
- 5日 Pasteur 会。抄読者小倉（安之）。夕刻岩田（植物生理化学研究所）に行き先生と一時間ばかり御話しする。論文提出。
- 7日 宇佐美（正一郎、S11）君の論文清書を先生から依頼されたのをする。
- 9日 八日午前三時英、自由フランス連合軍はパレスチナからレバノンに、又トランス・ジョルダンからシリアに侵入。ペタン元帥は待機の独軍も、ひとりの独兵もシリアに存在しないことを強調する声明を發した。
- 14日 柴田先生に御目にかかる。薬品に注文を出す。丸善でノートを發見し、六冊買い込む。
- 21日 “Louis Pasteur” の普仏戦争の項（1870—1872）再読の要。興味絶大。
- 22日 ラヂオで今朝午前三時ドイツがソヴィエトに宣戦布告し、ドイツ軍は国境各處から大挙侵入。独空軍はソ都市に爆撃を開始。フィンランド、ルーマニアも参戦したとの事。帰宅後夜ベルリンフィルハーモニーの放送（モーツァルト：セレナーデ、シューベルト：ロザムンデ間奏曲）フルトヴェングラー指揮をきく。
- 23日 どこでも独蘇開戦談で持ち切りなり。独は二か月でモスクワを占領すると言ふ。
- 27日 26日の独蘇戦の戦況を見るに蘇軍の抵抗増大し独軍の進撃は稍鈍り、殊に西部では發展なし。独機はレーニングラードと黒海沿岸を爆撃し、ソ機はハンガリー、ルーマニヤを爆撃す。
- 30日 Poe 全集第1巻を買ふ。アッシャー家を読み直す。ミンスク、バラノウイッチ、ルックで激戦続く（地図スケッチあり）。
- 7月 1日 ブレスト—バラノウイッチを進んだ独軍はミンスクを30日に占領、スモレンスクに進軍と伝えられる。
- 3日 吉川淳氏台北帝大予科教授に転任。夜Pasteur 会。
- 4日 スターリンは3日午前Radio を通じ全国民に重大危機に直面した事を訴へた。占領地区におけるゲリラ線と、国民のパルチザン組織を要求している。
- 5日 昼先生に御目にかかりPhenolの件報告す。ミンスク地区、ルック地区で大戦車戦。独羅軍はドニエストル河に殺到。ムルマンスク奪還か。独軍死傷者70万と報せらる。
- 7日 ミンスク突破の独軍はオルシア付近でスターリン線の背後に回ったと伝えられる。ベレジナ河畔の大激戦。
- 10日 学生生徒の運動、競技、講習会が禁止された。
- 11日 豪雨。一昨日から大召集があったらしい。教室の和田文吾氏や田中駿二郎（T15）兄が応召した。
- 12日 豪雨により東海道線不通になる。米国の参戦態勢。仏印の情勢etc. 甚だ険悪で日本も風雲急を告げる観あり。独蘇戦線は次の会戦を前に停頓している。
- 17日 Trichlorophenol の実験をまとめにかかる。
- 18日 細雨。朝刊紙で昨夜近衛内閣の総辞職を知った。近衛公に大命降下。

- 19日 近衛内閣成立。スモレンスク陥落し、ソ軍に退色漸く著しと伝えられる。
- 25日 夕食に銀座に行く。しゅう雨に逢ふ。店の早く閉まるのに驚く。モスクワ又爆撃される。
- 26日 日、仏印共同防衛成立。米、英、加は我が資産凍結を行う。
- 31日 独軍レニングラード近郊に迫ると言ふ。仏印増派軍サイゴンに上陸す。
- 8月 2日 柴田先生に御目にかかる。Trichlorophenolの実験を穴埋めしてまとめる事にする。
- 8日 遠藤沖吉君が研究室に尋ねて来る。奥貫（一男）、高宮（篤）の諸君と共に語る。
- 9日 柴田先生と御話する。タマエちゃん（*長兄長女、白百合学園和箏科生、のち宝塚歌劇団男役）研究室に来て顕微鏡を見てゆく。
- 13日 独軍は遂にオデッサ東部で黒海岸に達した。
- 15日 チャーチルとルーズベルトとの洋上宣言発表さる。“恐怖と欠乏のない世界”を要望して居る。
- 24日 晴れ。子供達をつれて小田急で稲田多摩川に行つて泳ぐ。案外人出少い。帰途小西家訪問。新宿駅に防空壕が出来る。
- 25日 研究室の帰途丸善にゆきポー全集第2巻を買ふ。ズッと前に「新青年」で読んだマリー・ロージェ事件を読む。
- 30日 25—29日の5日間東部戦線の某地でムッソリーニとヒトラーが会談した事が発表された。帰途丸善と富山房にゆく。トルストイの「セヴァストポリ物語」を買ふ。夜十二月と五月のセヴァストーポリを読む。「五月のセヴァストーポリ」は希有の傑作である。（翌日内容について詳しく感想）
- 31日 「セヴァストーポルの八月」を夜読了する。尊大さ、貴族趣味、賭け、公金賄賂、威厳の保持等々のロシア将校の人間としての欠点(?)人間らしさがコルニーロフ砲台の掩兵部の中での恐怖になれて赤裸々に示されて居るにも不拘、夫れが彼等のマイナスになって居ない。楽天的になった兵士隊のなごやかな生活、そして落城間際の白兵戦の凄惨な場面。最後にセヴァストーポールを見捨ててセヴァルナーヤに引き上げる兵隊達の素朴な怒りと悲しみと名状上すべからざる様々の気持。真実の美しさをまざまざと知らせて呉れた戦争文学はこの国には絶無である。ヴィボングル陥落、イラン帝王はアバンに蒙塵。
- 9月 5日 TCP-HemmungがRiboflavinによりaufhebenされる事を見出した。来週位からDinukleotidを大々的に作つて実験するつもりなり。レニングラードの攻防戦と、中部、南部におけるソ軍の逆襲が報道される。
- 7日 午前東京堂にゆき井上勇（前同盟パリ支局長）氏の「フランス、その後」を買ふ。現在のフランス人はペタンを尊敬しつつも信頼（政治的に）して居ない事、大部分がドゴリストである事。国民が釣と読書に耽っていること。尚又批判力が強いが責任感の弱い点がbebackの原因の一つに成す事etc.を説く。
- 10日 パリとオスロでcommunistsの騷擾絶えず人心動揺の兆。Osloでは戒厳令布かる。
- 12日 ルーズベルトは「防衛水域」に侵入し来れる枢軸艦艇を撃沈する様命令したと発表。独軍当局はおそらく十一月上旬迄に対ソ作戦の大部分を終了すると公表。

20日 夕方ミュンヘンでビールを飲む。19日独軍隊にKiev入城。城頭高くハーケンクロイツが翻る。日食。午後2時食後、洗面器の水にうつして見る。晴れたり曇ったり。

21日 昭和館でディターレ監督の「エールリッヒ博士」（ロビンソン演）を見る。anti-natzism映画と評されて居るが左程でない。パスツール映画に比べるとうるほひに乏しい。両学者の個性の差か？

24日 Cozymaseを作る。Phospho wolframsäure, Äther, Amyl alcohol等の不足。又N₂の不足で実験不便。

27日 湖南戦争の我軍は長沙を占領する。

29日 午後3時から医学部生理講堂で東京生理学談話会主催の講演会に柴田先生の同化作用を中心とする講演をきく。先生としては珍しく自信のある口調で岩波講座の論文とNaturwissenschaften にのせられた短い論文を中心として「私には独自の説があり、その当否は別としても断じて是は人の借り物ではない」と主張され、CO₂ Abgabe, O₂ Aufnahmeの発見（18世紀末、19世紀初）から説き起こし、Warburg の四hr説、柴田の説、是に対する反対や最近のStoll やEmmersonのUnit theory に及び、従来の物理学的方法で光合成の説明が行き詰まったからとて生物特有の現象の存在を主張するのは早計である。何となれば我々は未だ量子力学的方法を殆ど採用して居ないから」と主張され、方法としてのみでなく理論として新物理学に着目すべき事を論じられた。浦本（政三郎）博士は後で、「大変御熱心に」話されたと評された。我々は初めての先生の「自信」と「熱」と「新しい理論に対する関心」に接し感激させられた。

30日 米国のハリマン、英国のビーバブルック卿モスクワに到着し、三国会談開始す。

10月 3日 晴。Glucose がなくなり弱る。岩田に貰ひにゆく。帰途「のんき」に立寄りビールを飲む。赤門前で久保（秀雄）君に会い万藤でコーヒーをのむ。モスクワ三者会談終了。

4日 本年度米第一回収穫予定量5913万石。前年比-2.8%、前前年比-10.2%。ノイラート後任のハイドリッヒはチェコで峻烈な弾圧をやる。騒動の原因は(1)軍部による独立運動、(2)communists, (3)上層階級のサボタージュ(小麦粉買占、切符製造による攪乱)etc.

7日 午前千葉小菅刑務所に行き安達誠氏と話す。所長、兄上に面会。夕刻中野*に行き報告。義姉と長兄岳父に。（*長兄留守宅とその岳父宅の所在地。岳父は本庄繁、1931年関東軍司令官、1933年侍従武官長）

9日 夜 Pasteur 会。抄読者奥貫（一男）氏。

10日 ヒットラーは300万の軍勢でチモシェンコ軍を撃滅したと言ふ。イズヴェスチャは危機切迫を叫ぶ。モスクワ危うし。

11日 校正刷を先生から受け取る。帰途丸善でレターペーパー、封筒を買ふ。新書で“アラビヤのローレンス”を買ふ。

12日 昨夜鉄ちゃん（次兄）に召集令状来る。防空演習開始す。

15日 Acta*校正次々に来る。大学専門学校生との卒業年齢短縮法令発布か。独軍の一部はモスクワ30kmに迫り市内に砲声を聞くと云ふ。（*Acta Phytochimica 岩田正三郎氏の寄託金によって柴田桂太先生により編集され、岩田研究所で発行されたドイツの植物生理化学

雑誌、1922年3月創刊)

16日 ニュースで近衛内閣が「国策の遂行についての閣内の意見不一致」の為総辞職した事を知る。

23日 今夜から25日正午まで防空演習。夜灯管中11:25上野発の仙台行きで出発す。

24日 8時過仙台着。仙台ホテルに入る。小野君と同宿也。昼大学に行き遠藤(沖吉)君に会ふ。夜、学友会館で生理談話会。長尾(昌之)氏講演。帰途一番町藤崎裏のBon amiでビールのむ。山千(山口千之助)、小倉(安之)、久保(秀雄)、宇佐美(正一郎)、芳賀(健一郎)の諸君なり。

25日 朝大学で諸君に会ふ。昼一番町の紅屋で宇佐美君と食事。午後講演する。夜向山の東洋館で晚餐会。

26日 午前宮電で松島に行く。紅葉美し。午後大学で田宮、田中、宇佐美諸氏の講演を聞く。帰途田中ら5君と三浦屋で飲み、国府町の大安で遊ぶ。山千、宇佐美君は10:50pmで帰京、他は貝原君宅に泊まる。

27日 朝貝原君宅を出る。田中、升本二君と共に青葉城を訪れ駅に向かい、平泉にゆく。夜7時仙台に帰り三浦屋で飲み、9:25pmの列車で東京に向ふ。毛越寺を訪問。

11月 1日 柴田先生に平泉の話をする。

5日 栗栖大使米国に飛ぶ。日米会談の成否疑問あり。

6日 明日から実験する事にする。新しい助手顔をみせに来る。夜Pasteur会。抄読:久保君。気比丸ソ聯魚雷で撃沈さる。

11日 Malat にNicotinsäureを与へても O_2 -Aufnahmeは増大しないがkatalytische MengeのGlucoseを同時に与へると増大す。但しMehraufnahmeはM/500 Monojodoacetatにより害される。新発見なり。山口千之助君からAvenaを送って来た。

18日 来栖大使、ル大統領並びにハル國務長官と会談開始。

19日 新聞は日米会談と臨時議会の記事で埋められて居る。独ソ戦はこの処停屯の気味。9月13日付けのNatureと10月3日付けのScience届く。昨日入港の氷川丸が持って来たのかも知れぬ。

20日 曇。夜Pasteur抄読:山口、高宮。

21日 米、野村、来栖、ハル・ルーズヴェルト会談。独ソ戦今日で5ヵ月となる。

29日 午前柴田先生とCytochromの話をする。a₂b型のものにつきPD, Hydroquinon, etc.の影響を見ることにする。

12月 1日 実験、独ソ戦進捗せず。

3日 「種の起源」読む。

8日 日英米開戦。真珠湾爆撃ウエストヴァージニア他三隻撃沈。ラヂオは終日ニュースと軍歌を放送。

10日 演習動員召集で朝8:30池袋にゆく。上野、宮城前、靖国神社にゆき、5:00解散。街は警戒管制で暗し。全市の行軍人員25万。

18日 ハワイ海戦の戦果詳報発表さる。米太平洋艦隊主力全滅?

20日 久し振りで柴田先生と御話する。アクタは来年になるやも知れず。夕4:30学士会館で日本科学史学会の例会。

25日 大正天皇祭。午前中軍隊から帰って来た中村(浩)君と話す。夕方から研究所講堂で忘年会あり。鳥と酒で愉快的な集会であった。

27日 アレニウス“史的にみた科学的宇宙観の変遷”読む。殊にニュートン以前と最後の一章は精読を要す。指導者の科学上の業績に対する鋭い批判をしている(例えばカント)。是は類書にない点である。生命永久説には一考を要す。

1942年(昭和17年)

1月 7日 デュアメル“Vie des martyrs”読む。これは何度読返しても読める本である。日本でいつこの様な本が出るのか。

9日 午後日仏会館にゆきヴァレリ・ラド編集のPasteur全集第二巻借りる。桶谷(繁雄)氏(工学者、東工大教授)と会って感激して話し合う。

11日 バストゥール読む。丸善でLipmann“Urzeugung und Lebenskraft”買ふ。

17日 朝、中野から兄上(特赦により出所)来訪。夜、お茶の水の医師会館で科学史学会。シムポヂウム有益なり。発言者:桑木(或雄)、菅井(準)、古川、今野etc.。今回は民族性(日本で何故に科学が発達しなかったか、我国と比較し彼の長を知り、自己の国民性の欠陥を知れ)を論じたい。

19日 谷崎“猫と庄造と二人のをんな”読む。傑作なり。久し振りで谷崎の空気を吸った。

20日 侯爵*(マレー)と(徳川)義和氏(フィリピンへ)との歓送会を研究所講堂でやる。盛会なり。(*徳川義親、1918年に徳研創設)

29日 本年度第一回バストゥール会。出席八名。抄読者:田宮。

2月 5日 夕方宇佐美君から来信(札幌から)。長女桂さんを正月三日に肺炎性敗血症で失われた由。気の毒なり。尚、助教授(北大理学部植物学教室)にも任官したと言ふ。弔辞を送る。

15日 雪10cmつもる。夜十時半のニュースで「シンガポール島要塞の敵軍は今日午後一時五十分無条件降伏セリ」と発表。

18日 シンガポール(昭南島と昨日命名)入城式の日。正午より研究所講堂で祝賀会。

21日 夜、医師会館で科学史学会。田中俊(?)、中村両先生も御出席。桑木或雄:二儀略説について。討論(今野氏の発言有力)、中等教授(力量、待遇)、中等教科書(教授要目を擁護すること、詳しくすること)を中心に女子教育の問題、術語を優しくすることなど。

3月 5日 午前八時空襲警報。開戦以来最初なり。10:20解除。敵機30南鳥島に来襲。7機撃墜と発表。

6日 昼のニュースでバタヴィア陥落を聞く。帰途神田丸善でバレスの“コレット・ホドッシュ”を買ふ。ナチスによるフランス統治の前途如何。

12日 午後四時半頃警戒管制に入る。5:30pm上野風月で久保、木下、井口三君の送別会。

30日 ダイコンの種子を発育せしめる。

31日 Pasteur 翻訳大体終了。丸山政男“ソヴィエート通信”は期待以上面白し。

4月 2日 ダイコンのWurzelspitzeの呼吸測定。30本のSpitzeにGlucoseを加えたとき20cmm/

10Min O₂-Aufnahme。夕方田中潔君お子さんと来訪。

4日 夜医師会館で科学史学会。原光男氏の化学史方法論と阿倍徹氏のLeeuwenhoek。

9日 「科学日本」(大日本出版より発行)から依頼された原稿書く。夜、Pasteur会田宮氏抄読。

10日 Raphanus Nicotinamide とB₁positive。

14日 「科学日本」の原稿(A. Scent-Györgyi)を手渡す。

16日 昼電話きて中村君昨日召集解除の由知る。夕方宇佐美君研究所に来訪。小雨降り寒し。

19日 午前2時頃サイレン。午後1時頃サイレン。敵機見えず、砲声聞こえず、阻塞気球20位上る。

20日 朝警戒警報解除。午後1時、空襲被害は日本鋼管、マツダランプ、大井鉄道、etc.と言はれる。尾久の被害も大と言ふ。

21日 夕方宇佐美君夫妻、中村君来たりビール飲む。夜警報鳴る。直ちに解除。Acta出来上がる。

23日 夜Pasteur会。阪大の千谷(利三)氏来たりIsotopesの話あり。主に製法。宇佐美君も出席。

24日 田宮氏から論文用紙受取る。午後資源研に柴田先生を訪ねる。

28日 英機ロストク(バルト海)爆撃、被害大。Hitler演談。1941-42冬の陣地戦の状況報告あり。戦車、輸送機関不足の為、戦が冬に持ち越したと言ふ。尚42年(43年?)も冬にかかるかも知れぬと称す。

5月 9日 珊瑚海海戦発表。サラトガ、ヨークタウン撃沈。

14日 午後大学本部に行き、学位申請の手続きをする。独ソ戦再び本格的に再開す。

15日 夕五時より学士会館で「科学日本」の執筆者を囲む座談会。植村氏司会。渡辺慧、江上不二夫、福村耕男、湯浅(明)、式場(隆三郎)の諸氏出席。雑誌の方針につき討論あり。大いに愉快なり。

16日 朝中井(猛之進)先生の御宅に伺い、学位申請の挨拶する。

17日 午後成城に小西(興大学長)家を訪れ、先生と興亜大学の話をする。

22日 午後大学にゆき中村君に会ふ。夜、鉢ノ木で「科学古典叢書」の打合せ会*(*パストゥール論文集、山口清三郎偏「自然発生説の検討」発行の予定。)和田、篠遠(喜人)、湯浅、小野(記彦)、宝月欣二、大田(行人)の執筆者と丸山と佐々木、石原辰郎の出版者側と懇談。

24日 午前中成城中学の興亜大学試験場(予科第一回目の入学試験)にゆき小原氏*と会談。(*国芳玉川学園学長、玉川学園キャンパス内に興大教室あり)

30日 夜、学士会館で科学史学会年会。盛なり。

6月 1日 パストゥールのソルボンヌ講義訳了*(*4月22日のパストゥール論文集の一部)。

2日 昼食後侯爵と所長と研究員とで打ち合せ。午後一時半から講堂で侯爵からマレー、シンガポールの講演をきく。帰りに「アニリン」買ふ。

8日 朝10時より玉川開校式に列席（玉川学園のキャンパスにおける興大の開校式に教授として列席）。小西*、森**、小原氏の演説。音楽。昼食。夕帰宅、直ちに銀座の日本出版で合評会。生物側 石井信、中村、湯浅、山口の4人。化学側 江上（不二夫）、稲村、平（?）、の4人。（*重道。興大学長、教育学者、京大名譽教授、1933京大総長；**興大理事長、当時日本冶金社長、後昭和電工社長、衆議院議員）

11日 ミッドウエイ、アリューシャンで交戦。米航空母艦2（エンタプライズ、ホネット）撃沈。我方航母1撃沈1大破。

26日 午前中研究所にて侯爵送別会。服部、柴田両先生も御出席。明朝飛行機で昭南へ。

27日 夕方より東京会館で玉川の会議、小原さん大機嫌なり。帰途井上氏*と銀座まで歩き、共鳴す。帰宅11時。（*正蔵、ドイツ文学者、筆者とともに興大教授、玉川学園教授を兼ねる。ハイネ「歌の本」上S25，下S26 翻訳、岩波文庫）

7月 1日 夜、東京高等歯科で実験技術談話会の例会に出席、桶谷氏の紹介なり。和田文吾氏に会ふ。尚ほ浦和の和島君に久し振りで会ふ。

10日 エル・アラメインの激戦。ボルネージュ東方とカリニン地区で大激戦。赤軍危し。

14日 玉川で（玉川学園で教授の）辞令貰ふ。

26日 暑い風がある。

28日 パスツールのソルボンヌ講演了す。

29日 翻訳終わる。解説書き始める。

8月 1日 赤軍危し。ロストフ渡河軍はクシチェフカを、チムリンスカヤ渡河軍は北コーカサス中心都市サクスクを31日占領。スターリングラード方面ではカラチ及びクレツカヤ近傍で一大戦車戦を展開（図2）。

8日 午前本郷の化学教室にゆき、江上君よりパスツール「自然発生」の独訳本借りる。江上、稲村耕男両氏と三丁目裏百万石で昼食。

27日 小菅君帰還し研究室来訪の電話あり。夕5時高宮君と二人で目白駅に出迎え。東京パン地下室で語る。有益なる話しを聞く。

9月 2日 夕方、東京歯科にゆき、実験技術談話会で測圧法につき講演す。桶谷、稲村、平沢、和田、中山、新島の諸氏出席。帰途中山君と目白駅から歩く。

7日 スターリングラード市のすぐ近郊で激戦。陥落は時間の問題と伝えられる。ソ軍の一日の死傷7000と言ふ。第二のヴェルダンなり。

20日 スターリングラード市街戦。シベリアより独軍至るも、ヴォルガの橋梁破壊の為救援疑問なり。

24日 十一時から学士会館で中井先生還暦記念祝賀会あり。終って午餐に移る。盛大なりき。

10月 2日 夜、科学史学会に出席。天野氏のWienの講演ありき。

3日 午前、日仏会館にゆき桶谷氏に会ひ紹介の下に入会。午後は鉢ノ木にて篠遠、中村、湯浅三氏と共にす。科学史辞典打ち合わせなり。

30日 夜 5:30より学士会館にて植物生理談話会。田宮氏講演。

- 31日 午前中上野科学博物館で開催の第10回植物学会に出席。
- 11月 4日 夜、高歯にて実験技術談話会あり。研究と組織につき稲村氏の講演あり。帰途、桶谷氏に興大教授就任の件交渉す。
- 11日 北アフリカ戦線の意義重大。アルジェー、オラン既に米軍の手に落つ。カサブランカまた危し。チュニジアに進撃か。
- 16日 米国上陸軍はモロッコとアルゼリアの占領を大体完了す。独軍はトブルク以東に撤退す。米軍チュニジアの国境を突破し、ビゼルト近郊で激戦との報あるも確かならず。チュニジアの占領軍の成否は戦局の大勢を決せん。
- 12月 6日 模擬動員招集のため朝八時に長崎第四十号に集合。藤井利重氏*、川西先生に会ふ。十一時出発、石神井に行軍、一時半着。休憩。昼食。三時より電車にて東長崎着。五時解散。
(*近くに住む義兄、当時の文理大教員、後、教育大教授)
- 26日 夜、日比谷公会堂に玉川の(玉川学園のコーラスが参加しているベートーベンの「第九」を綱子、健ちゃんときく。盛会なり。
- 30日 夜宇佐美君北海道より来る。東京堂で「それでも地球は動く」を買ふ。

1943年(昭和18年)

- 1月22日 アナトール・フランスの「ジャン・セルヴィアン」読了す。
- 23日 スターリングラードの独軍は赤軍によって完全に包囲さる。北阿(*アフリカ)ではトリポリの攻撃開始。
- 28日 コルベンハイヤー「Amor Dei」を求む。ユダヤ人を扱って居り、著者が生物学を研究したことを知り興味を覚える。
- 2月 4日 午前からスターリングラードの独軍全面的に降伏。
- 9日 夜、興大入試に関する選考会議を開く。紛糾を見る。我々の方針を貫徹せしめる。蓋し、学校の名譽を傷つけざらんが為なり。
- 17日 ロストフより独軍撤退す。
- 20日 独軍ハリコフより撤退す。
- 21日 午前中在郷軍人会の査閲。午後防空演習。
- 27日 伊東の本屋でバルザック二冊、ガルガンチュワを買ひ求む。
- 3月10日 昼玉川で陸軍記念日の式。
- 12日 研究所に出勤。服部先生より缶詰腐敗の件。
- 18日 午前、服部先生と西落合の相馬氏経営関東缶詰食品工場にゆき腐敗対策の相談をする。Clostridium の作用らし。午後高樹町の資研*に柴田先生(初代研究所所長)を訪れて中を見せて戴く>(*文部省資源科学研究所、青山高樹町、12月創立)
- 22日 研究所でカンヅメの実験。イルティス:「Mendelの生涯」を買ふ。大体Batesonの伝記を詳しくした程度であるが、近来の読み応えある本なり。
- 4月10日 翻訳「自然発生について」完成。午後大日本出版に行き、丸山氏に手渡。
- 17日 午後神田に本を買ひにゆき宇佐美君に会ふ。十日前上京せしよし、田中氏(信徳、遺伝学)。朝日新聞「天平の文化(下)」を読む。

- 18日 午前「解説」を書く。午後五時銀座で宇佐美君と落合ひ、千代田の横の豚かつ屋で飲む。
- 21日 研究所でベルトラン定量方の準備をする。
- 22日 Inulin実験。
- 5月 5日 徳川侯爵のエハガキ昭南島より来る。
- 6日 夜服部報告会の報告を書く。実験を大いにしたい。題目は：E.coliのoxydative assimilationに対するSulfonamidの作用。2,4,6-Trichlorphenolの実験をFericyankali-Methodeで行なふこと。
- 12日 夜「解説」を書く。九時過ぎ警戒警報発令。月明。
- 15日 警報解除。米軍アッツ島に上陸す。
- 22日 玉川にて「青少年学徒に賜りたる勅語」奉戴式。小原学監の演説あり。学校に対する職員の批評云々の言あれども意義不明なり。朝刊紙にて、山本五十六大将戦死の報を知る。
- 25日 玉川に行く。夜井上君来たり、小原学監の演説内容その他の件話題となる。井上君はGoetheを、余はPasteur を専心研究することに決す。
- 28日 研究所にてColi Autat-Atmung に対するSulphapyridin, Sulfamethylthiazolの影響(1:5000)を見る。後者は害するらしい。研究室にて山田坂仁氏に面談、北隆館よりパストゥール全集出版の件。
- 31日 朝刊紙にてアッツ島の日本軍二千余全滅の報を知る。29日夜玉砕。負傷者は自刃。米軍二万人の内六千死傷の報。
- 6月 6日 パストゥールの解説の方針変更して書き直す。
- 12日 曇。今日より興大学生軍隊の演習にゆく。
- 24日 服部先生に研究所継続御願います。二年続けることに決定。
- 7月11日 反枢軸軍10日仏暁シチリア島東南岸に上陸。オリヨール、ピエルゴロトクールスク方面で独軍進出。Balzac の「ポエームの王」読む。
- 23日 午後5時より防空演習。東京では各戸に防空濠作らる。
- 27日 朝刊紙にてイタリア政変を知る。ムッソリーニ下野し、ハドリオオ元帥首相となる。大日本出版より「魚の博物学」を貰ふ。赤軍オリヨール5-8マイルに迫る(スターリン指揮の下に)。
- 8月12日 ハリコフ、ブリアンスク目指してソ軍進撃。研究所に行く。トルストイ「闇の力」読む。傑作なり。
- 13日 お盆なり。ゴーゴリ「検察官」久し振りで読み直す。傑作なり。「黄金の子牛」を思い出す。
- 16日 大日本出版の為に「パストゥールとティンダル」の筆を執る。
- 18日 Buttersäurebakt. をKartoffelnより分離する事に着手。17日枢軸軍シチリアより全面的撤退。英米軍はメッシナより伊本土を一分間に50発の割合で砲撃。ハンブルグの被害は住宅の7割破壊。死者2万余。
- 9月 1日 千代田横の支那料理店で食事中警戒警報。直ちに帰宅。敵機、南鳥島に来襲、艦砲

射撃を加ふ。

9日 Butanol 菌略ほ完全に分離す。Kartoffelbodenにて植継続行の予定。夕刊紙にてイタリア無条件降伏の報伝はり騒然たるものあり。ラヂオに人だかりす。夕刊買に行列あり(神保町)。

18日 田宮氏より「光合成の機作」贈らる。独軍ノヴォロシイスク撤収。

11月23日 防空演習。夕刻電車で第一ホテルに井上君の披露に出席。

24日 徳研へ。研究室の畑で出来た糯で赤飯を作り昼に食堂で皆で会食する。

12月4日 麴町で授業。午後より来年の入試に関する準備打合わせ。

18日 玉川へ。午後より研究所へ。Butanolbakterien の実験開始。

20日 江上君名古屋より上京。研究所にて話す。22日に会ふ約束。

22日 1時半頃柴田先生徳研にお出になる。午後銀座にて落合ひ、北隆館にゆき山田、石原(大日本出版)両氏と懇談。江上君にfermentation(?)をお願いすることに決定。

24日 研究所にて午後四時より忘年会。酒持寄りで二升。鳥二羽つぶし歓談。来年は如何ならむと一同語り合ふ。九時の電車で帰宅。

27日 研究所へ。帰途資研に回り柴田先生にSulfonamidのDataの写しを渡す。

1944年(昭和19年)

1月4日 履歴書を持って資研に柴田先生を訪ねる。差当ってButanolbat. 乳酸菌、酵母のWachstumに対する‘pab’の影響を見ること。

11日 徳研へ。Butanol 菌培養基(合成)に‘pab’を加える。午後二時より玉川で工大八木学長の講演。暗記器、電波兵器について。

20日 八巻(敏雄)君研究所に来訪。

2月5日 午後より職員室で興大の入試の件に関し、日本冶金(興大生の学徒動員先)側と学校側で協力。井上、笠原、佐藤氏と大阪出版に決定。

11日 朝着阪。堂島浜通水明館に入る。大阪は食糧なく外食不能なり。旅館に米炭持参。

27日 朝徳研へゆきButanolbakt のWuchsstoffの実験。大久保でギゾーの「ヨーロッパ文明史」を求む。

29日 玉川より徳研へ。午後資研へ。Hefewasser+Glucose+Asparaginat+Salzで5lのButanolgärug実験開始。

3月2日 徳研へ。午後資研にゆく。夕刻小田急新宿駅にて北大の宇佐美君と落合ひ帰宅。夜遅くまで語る。

15日 玉川より文部省官房秘書課に寄り?高招集の件話す。係員と共に赤坂の連隊指令部にゆき解決す。旅行制限令。

24日 午後資研にて植物の会(小生歓迎会を兼ね)。亘理(俊次)君の静岡発掘の話しあり。

29日 Butanolbakt. に対するSulfonamidの実験徳研にて成功。

4月3日 資研にゆく。ClostridiumのWachstumはSulfonamidでhemmenされ、p-Aminobenzoensäureでaufhebenする件報告。

5日 朝十時上智大学に興大職員一同参集。森理事長、小西学長より報告あり。新発足。

- 10日 玉川に行きガラス器具の整理。午後資研へ。
- 12日 漸く暖かし。午前徳研へ。午後大岡山（興大の教室として大岡山の東京工業大学をも借りる。八木学長の好意による）に行き予備部学生に講演（Wuchsstoffにつき）する。
- 14日 午前玉川へ。バランスを上智に運ばず。午後徳研へ。徳川侯爵昭南島より帰朝される。会って御話しする。
- 15日 朝9時より上智にて始業式。終わって青山通りを神宮に参拝。午後徳研に。資研に回り先生にお会い出来ず。お宅を訪ね岩田君の件相談。
- 18日 上智で講義。午後資研にゆく。夕方五時より徳研食堂にて徳川会長帰朝歓迎会。一同の持ち寄りにて愉快なり。ビール七本、ブドー酒二本、ウイスキー一本、酒四合、野菜煮、カステラ、赤飯、etc.七時より、講堂にて会長の講演あり。
- 24日 午後資研にゆく。p-, o-AmidophenolによりButanol 菌生育阻止さる。p-, m-Oxybenzoeresは影響なし。八巻君と川崎の東京電気にゆき光電測定計催促する。
- 5月 7日 朝、玉川にゆき生徒と本の整理。2260冊を一室にまとめて封印。財団関係者二人。井上君も参加。服部報告会に報告書（Trichlorphenol）を添へて申請す。
- 11日 畑作りする。トウモロコシ、南瓜を蒔く。
- 14日 大掃除。庭に玉葱の苗80本、ミョウガの苗5本植える。
- 15日 徳研より資研へ。Avidinを使用する事によりHefewasserを 'pab'-fraction と Biotin fraction に画分する事に成功せる旨報告。助手使用の件、将来の研究方針につき、柴田先生と懇談する。
- 17日 夕方徳研食堂にて研究所の改組につき会談。会長、柴田、服部、鈴木、五味、研究員全部（湯浅欠）出席。七研との連携を中心に相談。
- 18日 午前中徳研にて服部先生と将来の件懇談。Avidinを乾燥卵白より製造始める。
- 24日 晴。徳研にゆく。今月一杯で退職に決定。
- 27日 午後より岩田研究所にゆき先生に拝眉。今後の実験は岩研と資研で継続する事に決定。岩研の二階に席を与えられる。
- 29日 徳研にてあと片付け。三時よりお茶の会。侯爵は明朝の飛行機で昭南島へ。服部所長、柴田先生辞表提出。
- 6月 1日 「道路菜園」にトウモロコシとハトムギをまく。
- 7日 岩田研に。夕刻味の素ビル大日本冶金本社にゆき、「微生物と工業」第二項。Enzymeに関する興味ある質問あり。また、条件如何により醗酵産物異なる点も聴者の興味を惹く。以上二点要注意。米英軍ノルマンディに第二戦線開始。
- 16日 警報中麴町へ。昼岩田に回る。ニュースにて今晚二時九州に敵機20機程来襲。また昨15日サイパンに上陸の報知る。
- 30日 麴町（上智大キャンパス）にて二年生試験。午後より講堂にて三年生出動の壮行会。軍事教官の講演（訓示）。時弊を衝き我が意を得たり。
- 7月 1日 午後より岩研へ。三時頃岩田氏研究所に来所。柴田先生以下所員全部にて応接室にて語る。

2日 日本化学工業に三年生出動(学徒動員)の監督に赴く。製品の珪酸ソーダ、硫酸アルミ、ぼう硝、クローム関係、 $KMnO_4$ 、 H_2SO_4 、 Cr_2O_3 (研磨剤) etc.。四時辞去。小雨中を疲れて帰宅。37.1度発熱。夜岩田氏来る。明日下阪の由。

5日 5時半警報解除。警報は九州に第二次空襲ありしたためなり(被害なし)。

10日 午前岩研へ。HefeをAutolyseするとWuchsstoffの抽出さるる量著増し、Antisulfonamid actionも増大。午後より資研にゆき先生に報告す。

14日 正午より地久庵にて上智興大共同職員顔合わせあり。午後より資研講読会。「微生物の生長素」につき一時間半にわたって話しする。

19日 一日岩研にて実験し、夜帰宅。サイパン日本軍全滅発表。

20日 東条内閣十八日午前総辞職の由発表さる。

21日 朝文部省にゆき戦時招集猶予手続きの件相談。

8月1日 庭のウヅラ豆を始めて採る。南瓜の雌花初めて開花。受粉援助。一人米5合と代替にて馬鈴薯一貫目づつ各戸に配給される。

10日 松崎悦三君の推薦状(*興大予科2年が北大理学部を受験するための推薦状、後松崎氏は筆者の資源研助手)を坂村(徹)、宇佐美両氏に出す。

16日 長尾研究所にゆき乳酸菌株(Kinsi I, II, F)貰う。岩研にて寒天溶解菌実験。反枢軸軍十四万夜半よりカンヌ、ツーロンの間で南仏に上陸す。

9月4日 川崎にゆく。二年生大日本冶金工業に出動、入所式。小西学長、森社長の式辞あり。昼食。帰途早川氏と学校に立ち寄り、森氏と話す。夜、早坂、山崎、林、松崎(興大学生達)来りおそくまで話しする。山崎台北大学に入学。

11日 岩研にて実験。三時半新宿駅で宇佐美君に落合ひ、帰途ウイスキー、ビールを飲み歓談。

14日 午前麴町。午後より資研にゆき先生と談る。B₆, Borsäure, Arginsäure, Milchsäureの実験をすること。

22日 岩研にて実験。Borsäure+B₆(B₆効果なし)。夕方資研にゆく。先生より学振内の第73委員会にて寒天の仕事のThemaとして取り上げる予定の由承る。大体お引受けする。

28日 岩研にて実験。Agarbakt.につきVerflüssigung, N-Quelle, Wuchsstoff, O₂-Bedarf, Säurebildung; Reduktionsvermögen, etc.の諸点大体判明す。夕方柴田先生研究室にお見えになる。

30日 晴。九時より興大予科第一回卒業式。正午より岩研にて寒天菌の実験。

10月2日 九時に川崎に行く。小雨。講堂で学部第一回入学式。興大小西学長、森理事長、八木*学長、藤森川崎製作所長の挨拶訓示あり。渡辺良太郎の宣誓。終わって撮影、昼食。早川君と新橋まで同車。資研にゆき帰宅>(*秀次。東京工大学長、八木一守田アンテナ発明)

8日 晴。川崎に行く。所長、社長と面談。(1)生徒の訓練、(2)学業の問題。

11日 午後資研にゆき八巻君と共に柴田先生に面談—。学術振興会議の研究嘱託の件承る。

11月1日 岩研で実験。午後警戒警報。二三分のち空襲警報。地下室に退避。一時間にて解除。敵機数機京浜地区に侵入の由。夕刻警戒警報も解除。深夜、再び警戒警報。

24日 午前岩研。昼資研にゆく。池袋で警戒警報。渋谷で空襲警報。青山倉庫に避難。資研では地下室に避難。敵機70が来襲。内5機撃墜。

27日 麴町で授業。昼より空襲。夕方解除。敵機40来襲。

30日 午前0時空襲警報。深夜小雨なり。敵機20 駿遠、帝都に侵入、火災起る（神田、茅場町、芝方面）。

12月 1日 小雨。朝神田の焼跡みる（図3）。岩研で実験。

4日 麴町で授業。午後より来年の入試に関する準備打合わせ。

1945年（昭和20年）

1月19日 朝10時より学士会館にて学振73小委員会。柴田、小南、一一、浅井諸氏。山口、八巻、有馬、吾妻報告。

5月15日 荷造りして朝狩川（*筆者以外の家族の疎開先。筆者は疎開せず東京に止まり、大学、研究所に勤務）向発送。夜早川君泊まりに来てスーツケースに詰めてくれる。

16日 いよいよ狩川向出発。夜7:20の秋田行に乗車。相当混んで居るが席を見つける。子供達喜んで居る。

17日 午前十一時狩川着。

19日 午後4:46の列車で狩川発上野に向ふ。

20日 早朝来宅。早川、久末（興大関係者）両氏との共同生活（家族を疎開させて、東京に残った興大教授3人の筆者宅での共同生活）始まる。夜、寺島（自宅近所の警察署長）氏を招いて麻雀する。ホットケーキの渋いのを作る。

21日 岩研にゆく。

24日 午前1時半より空襲。B25、200機で品川、大森、任原を狙う。電車不通の為家に居る。

25日 高樹町の資研も焼失。

6月 1日 10:10の夜行奥羽線回り青森行きにて狩川に向ふ。ひどく混む。

2日 早朝福島で下車。二時間待って大館行きに乗り換える。新庄でまた三時間待つ。六時狩川着。一同元気なり。

7月 4日 夕刻の列車で新庄経由帰途につく。

5日 朝帰宅。大岡山にゆき久末氏と共に夕刻町田へ。

6日 早朝原町田駅長と談判して信州行の切符手に入れる。11時八王子発で社光寺に向かふ。

7日 朝、長野県社光寺町役場に村長を訪れ、学校信州疎開の件を相談。早川氏は豊橋（早川氏家族疎開先）に向ふ。井上氏と共に学生の作業場を回る。夕方、村長、農業会役員、駅長と飲む。

9日 朝、井上氏は下久型村へ。小生独りで昨日訪問し残した作業所を回り、午後、天竜添ひに徒歩で下久型に向ふ。作業場回りをする。夜、指導員の広田氏、井上氏と共に広田氏の宿で飲む。

11日 早朝起床。役場に村長を訪れ礼を述べる。国民学校で解散式、学生と駅に向ふ。学

生はそのまま帰京。小生は社光寺で下車。井上氏と農業会で話す内に早川氏、豊橋より来る（社光寺の解散式は井上氏）。三人で農業会に泊まる。

12日 早川氏と二人社光寺発豊橋経由帰京の途に就く。豊橋、浜松、静岡、清水の被災地を車窓より眺める。

26日 昼に外苑の青年館に金子大尉を訪問。予二年の動員（信州）の打合せ。

28日 岩研にてHefeの実験。午後川崎にゆき小西学長を中心に相談。

8月 1日 四谷講堂にて新一年入学式。終わって山田先生、早川氏と共に外苑青年会館に東部軍経理部の金子正三大尉を訪れ、学生の動員（信州松代）の件を相談。夜八王子焼爆ある。

2日 朝、三鷹駅に集合。小西学長、榎本、早川、加藤諸氏と新入生と共に第一軍需廠第十一製造所（中島??工場）の農耕係にゆき入所式。

3日 岩研。

4日 川崎にて教授会。

5日 日曜。在宅。

6日 岩研。

7日 中島にゆく。空襲（船上機）に遭う。

8日 岩研へ。連日空襲なり。

9日 岩研へ。

10日 青年館に東部軍経理部を訪れ、松代行き同意求める。夜行にて出発の予定なりしも空襲のため不通の箇所（田端—赤羽）ありし為止む。

11日 午後川崎で教授会。帰宅後早川氏と上野駅にゆき松代向夜行に乗り込む為行列。暑中に空襲警報。地下室にて行列の儘退避。遂に発車は12日午後3時。

12日 早曉上野発。予定よりヒドク延着して松代着。加藤少佐と面談。学徒動員打合せ。

13日 朝九時松代発。篠ノ井まで自動車で送られる。駅で四回空襲に遭ふ。艦載機により北信爆撃なり。午後3時漸く乗車。直ちに川中島で空襲に遭ひ、車から飛下して桑畑に伏す。その間50分、三回来襲。長野駅機関庫曝砕さる。線路も不通。夜9時半漸く発車。翌14日午前0時直江津着。4時に秋田行に乗車。

14日 午後11時狩川着。陸羽線の連結悪く、余目より狩川迄徒歩。ソ聯参戦等の悲観材料山積し、物情やや騒然。夜ラジオにて明日重大放送ある旨再三予告。

15日 正午天皇の放送。敗戦。続いて首相の内閣告論(?)。戦争終結で安堵せる地方人と憤慨せるものとあり。

16日 出発の支度。早朝一番で福島へ。福島一時発の列車で上野へ。車中敗戦の話で持切りなり。宇都宮焼跡を見、予定より延着して九時半上野着。東神奈川駅で泊る。憲兵と知合になり豆を与えタバコと交換す。

17日 早朝帰宅。7時頃山田坂仁氏諏訪より来訪。早川氏と三人で新事態。将来の計画につき相談。午前中、三鷹の中島工場（学生の動員先）にゆく。

18日 午後より川崎にて教授会。冶金工業は解散準備に忙しく、倉庫の物資の分配始む。第一教室に学生集め学長より新事態に対する訓示あり。

- 19日 晴。朝、外苑青年館にゆき自動車借用の件頼む（川崎所在の興大機械を他所に転出せしめる為）。午後、中島に寄り動員解除式行ふ。
- 20日 岩研にゆく。
- 22日 大岡山工大にゆく。一時頃より興大生集会。一同に訓示を与へる。明日より午後工大教室を借りて興大授業開始。
- 23日 原町田に米第八軍の1st Brigade 進駐。トラック、ヂープ転々す。
- 9月 5日 大岡山にて興大の講義あり（早川氏の人文）。終わって学生と活発に討論。
- 7日 朝、山田坂仁氏長野より来訪。久末、早川、山田、小生四名で学校の（興大）対策を論じ、昼食を共にす。夕刻早川氏と二人で散歩。町の大通りには米兵のトラック、軽自動車（ヂープ）で混雑す。
- 8日 原町田中心に駐屯の米第八軍騎兵第一師団東京に進駐。将校は第一ホテルに兵は代々木練兵場へ。
- 11日 三時のニュースにて東条の自殺未遂を知る。
- 12日 岩研へ。昼のニュースで戦争犯罪者、東条以下*の氏名発表。大岡山で人文講義。終って討論。（*長兄岳父、本庄繁—11月20日割腹自害—を含む）
- 16日 朝、興大予科二年生、松沢来る。昼まで話し込む。午後より加藤君来る。
- 22日 広島、長崎へ出張の件につき柴田先生より連絡あり。岩研にゆく。先生に会えず、林氏と目白に行く。出張取止に決定。
- 26日 岩研にゆく。帰途本郷柴善で「パストゥール蚕病論」を10円で購求。
- 27日 岩研にゆく。甘薯二貫匁分配。夕方より雨（五泉より到着の馬铃薯軟化病菌の実験開始）。
- 30日 午後より道端に畑を作り小松菜、ホーレン草蒔く。
- 10月12日 大阪ビル7階の伊東氏方に新時代社を訪ね北条氏と語る。
- 14日 久末氏柿の買出しにゆく。午後より河野、え野本等来り語る。
- 18日 大岡山にて興大工学部学生に人文講義。
- 19日 岩研にゆく。

筆者後記：日記中に現れる人名が姓だけの場合、筆者らが推定できる限り括弧内に名を加えた。

謝辞：本稿を纏めるにあたり、お世話になった元資源科学研究所員松井健、松崎悦三、山辺（村瀬）アキ代、元興亜工業大学学生寺田治生、早川靖式（東京工業大学名誉教授）、山口綱子、山口芳江（山口一太郎夫人）、山口平四郎（立命館大学名誉教授）、藤井徳也（元岩井産業副社長）、陸川亨子（日本女子大学図書館員）、岡部昭彦（元中央公論社自然編集長）の諸氏に厚く御礼申し上げます。

文 献

安藤 皎一、小倉 謙：終刊の辞。資源科学研究所彙報、75。1971。

Corner, E. J. H. （石井美樹子訳）：思い出の昭南博物館—占領下のシンガポールと徳川候。中公

- 新書（中央公論社）、1982。
- Bünning, E. (田沢 仁、増田芳雄、松本友孝、橋本 明訳)：分子生理学の先駆者ヴィルヘルム、ペッフアー。学会出版センター、1988。
- 増田 芳雄：シンガポール植物園と郡場寛先生。日本植物生理学会通信、58：12—15、1993。
- 増田 芳雄：植物学史。培風館、1992。
- 松井 健：資源科学研究所案内。資源科学諸学会連盟・資源科学研究所編。1954。
- 中村 輝子、増田 芳雄：湯浅明先生と昭和初期の東京帝国大学理学部植物学教室。日本植物生理学会通信、65：11—14、1995；（承前）同、67：13—16、1996。
- 日本植物学会百年史編集委員会編：日本の植物学百年の歩み—日本植物学会百年史。日本植物学会、1982。
- 大田 信：山口清三郎博士を偲ぶ—日本の新しい生化学の礎石。自然（中央公論社）7月号、54—54頁、1953。
- パストゥール（山口清三郎訳）：自然発生説の検討。岩波文庫（岩波書店）、1970。
- 高橋 泰常：山口さんの病気。生物科学（岩波書店）5：138—139、1953。
- 田宮 博、小倉 安之、柴田 和雄、高宮 篤、長谷 栄二、柳田 友道：徳研盛衰記—田宮博氏に聴く徳川生物学研究所。自然（中央公論社）9月号、1970。
- 宇佐美正一郎：山口清三郎君の業績について。生物科学（岩波書店）5：74—77、1953。
- 山田 坂仁：山口君のこと。生物科学（岩波書店）5：77—78、1953。

別表リスト

A. 論説、総説、著書および翻訳等（原著論文を除く）

1. レネ・ユルムセール著『生体酸化還元』田宮博、奥貫一男、山口清三郎、高宮篤共訳、裳華房、1935。
2. インドフェノール酸化酵素に関する二、三の新研究。山口清三郎、田宮博、小倉安之。科学6（9）：394—396、1936。
3. 生体酸化の諸問題（I）—A.V.Szent-Györgiの研究業績その他。科学8（8）：375—379、1938。
4. 生体酸化の諸問題（II）—A.V.Szent-Györgiの研究業績その他。科学8（9）：424—427、1938。
5. 合目的性と因果性。理論（日本評論社）1（2）：14—30、1947。
6. パストゥール著『自然発生説の検討』翻訳。北陸館。1948。
7. 生命現象の新しい把握について—ソ連植物生理学の最近の成果。理論2（7）：16—28、1948。
8. 科学的生命論のために—オパーリン『生命起源』批評—唯物論研究（三笠書房）2：10—128、1948。
9. 資源植物事典。柴田桂太編。北陸館。分担。1949。
10. 細胞呼吸の理論の発展。資源科学研究所彙報17—18号（柴田桂太博士記念号第一部）：9—14、1950。
11. 「生物学事典」八杉竜一、真船和夫編。生化学項目分担。霞書房。1950。
12. 資源科学研究所。化学21（3）：22—25、1951。

13. Diauxieについて—Diauxieの概念、その本質、機構に関するJACQUES MONODの見解の紹介。生物科学3(3)：136-142、1951。
14. 「生命の起源」『生命論の展望』39-76頁。北陸館。1951。
15. 『地球と人類が生まれるまで一目で見る世界史』島村福太郎、鈴木好一、山口清三郎、北崎梅香、和島誠一共著。日本評論社。1951。
16. 「亡命欲」朝日新聞、学会余滴。1952年1月26日。
17. オパーリン著、山田坂仁訳『生命の起源』への後書き。三笠文庫、1952。
18. 「進化の生化学」科学22(10)：534-539、1952。
19. 「ダーウィン」『近代思想十二講』243-267頁、ナウカ社。1952。
20. バナール著『生命の起源—その物理学的基礎』山口清三郎、鎮目恭夫共訳。岩波新書。1952。
21. 「発酵」岩波全書。1953。
22. 第2回国際生化学会議Aubel 教授の所感。生物科学5(1)：42-44、1953。
23. 「生物の歴史」(毎日ライブラリー)編および生化学(173-202頁)分担、毎日新聞社。1953。
24. 碓井益雄他編：生物科学事典。生化学関係項目分担。みすず書房。1956。
25. パストゥール著『自然発生説の検討』翻訳。岩波文庫。1970。

B. 原著論文

1. Tamiya, H. and S. Yamaguchi: Über die Aufbau- und Erhaltungsaerobic. Beiträge zur Atmungsphysiologie der Schimmelpilze III. Acta Phytochim. 7:65 (1933).
2. Tamiya, H. and S. Yamaguchi: Systematische Untersuchungen über das Cytochromspektrum von verschiedenen Mikroorganismen. Ibid., 7:233 (1933).
3. Yamaguchi, S.: Über die Beeinflussung der Sauerstoffatmung von verschiedenen Bakterien durch Blausäure und Kohlenoxyd. Beiträge zur Atmungsphysiologie der Bakterien. I. Ibid. 8:157 (1934).
4. Yamaguchi, S.: Untersuchungen über die intrazelluläre Indophenolreaktion bei Bakterien. Beiträge zur Atmungsphysiologie der Bakterien. II. Ibid., 8:263 (1935).
5. Yamaguchi, S., H. Tamiya and Y. Ogura: Über die Isolierung und die Eigenschaften der Indophenoloxydase aus Hefezellen und Herzmuskel (Vorläufige Mitteilung). Ibid., 9:1003 (1936).
6. 山口清三郎、小倉安之：生体内に抽出せられたるインドフェノール酸化酵素に関する二、三の研究。日本学術協会報告12:98 (1936)。
7. Yamaguchi, S.: Über die Oxydation von verschiedenen Phenolkörpern und Phenylendaminen durch Bacillus pyocyaneus. Beiträge zur Atmungsphysiologie der Bakterien. III. Acta Phytochim. 10:171 (1937).

8. Yamagutchi, S.: Einige Untersuchungen über das Cytochrom der Bakterien. Bot. Mag. 51: 275 (1937).
9. Yamagutchi, S. und S. Usami: Über den Flavinegehalt der Mikroorganismen. Cytologia 9: 419 (1939).
10. Yamagutchi, S.: Vergleichende Untersuchungen über die Oxydationswirksamkeiten der Bakterien und Hefen gegenüber einigen organischen Verbindungen. Beiträge zur Atmungsphysiologie der Bakterien. IV. Acta Physiochim. 12:115 (1941).
11. 山口清三郎: 生体酸化触媒の作用機構に関する研究 (第1報) 数種の有効物資に対する細菌及び酵母の酸化能力の比較研究。服部報公開研究報告9:530 (1941)。
12. 山口清三郎: 生体酸化触媒の作用機構に関する研究 (第2報) 細菌による脂肪酸の酸化に関する研究、(第3報) ニコチン酸と細胞呼吸。服部報公開報告10:358 (1943)。
13. 柴田桂太、山口清三郎: 微生物の増殖促進物質に関する研究 I. アセトン・フェノール菌の増殖ビタミンについて。資源研彙報11:1 (1948)。
14. 柴田桂太、山口清三郎: 微生物の増殖促進物質に関する研究 II. アセトン・ブタノール菌の増殖ビタミンに関する研究。同上12:1 (1948)。
15. Shibata, K. and S. Yamagutchi: Effect of phenolic substances on the metabolism of colon bacteria. Proc. Japn. Acad. 24(10):5 (1948).
16. Shibata, K., T. Yamaki und S. Yamagutchi: Über die Wuchsstoffe für *Clostridium acetobutylicum*. I. Mitteilung. Acta Phytochim. 15:113 (1949).
17. Shibata, K., S. Yamagutchi und T. Yamaki: Über die Wuchsstoffe für *Clostridium acetobutylicum*. II. Mitteilung. Ibid., 15:123 (1949).
18. 柴田桂太、山口清三郎: 病原菌に対する化学物質の作用の生理化学的研究 I. 大腸菌の物質代謝に対する phenol 誘導体の作用について。資源研彙報13:1 (1949)。
19. Yamagutchi, S.: Studies on the enzymic constitution of bacterial cells. I. Appearance of propionic enzyme activity in *Pseudomonas aeruginosa* and its inhibition by dinitrophenol, methylene blue and triphenylmethane dyes. Miss. Rep. Res. Inst. Natural. Resources. 23:48 (1951).
20. Yamagutchi, S. and E. Matsuzaki: Studies on the enzymic constitution of bacterial cells. II. Effect of glucose on the appearance of propionic and glutaric enzyme activities in *Pseudomonas aeruginosa*. Ibid., 24:33 (1951).
21. Yamagutchi, S. and E. Matsuzaki: Studies on the enzymic constitution of bacterial cells. IV. Effect of the ammonium sulphate on the appearance of propionic enzyme activity in *Pseudomonas aeruginosa*. Ibid., 26:47 (1952).
22. Yamagutchi, S. and Matsuzaki: Studies on the enzymic constitution of bacterial cells. V. Nitrogen sources of propionic enzyme appeared in *Pseudomonas aeruginosa*. Ibid., 27:91 (1952).
23. 山口清三郎、松崎悦三: 酸素の生成を支配する諸条件について。酵素化学シンポジウム

第7集、16 (1952)。

24. 山口清三郎、松崎悦三、村瀬昭代：高等植物組織の酵素系の研究。第一報。インゲンマメ種子中の胚軸呼吸系について。資源科学研究所彙報 30:63 (1953)。

(1—23)は、山口清三郎氏を悼む「山口君の業績について」宇佐美正一郎、生物科学5(2)：74—78、1953、より転載。

(24)は、文部省科学研究費交付総合研究「植物組織及び器官の分化と発生に関する研究」1952、1953年度、代表者山口清三郎、1954年度、代表者前川文夫、の一部である。